



和'S YAMATO

(わずやまと)

夏号 2016



くろふ 黒斑山(浅間山の第一外輪山)から浅間山頂を望む。
(撮影 大谷隆司さん)

- ◎ 北条氏の滅亡で秀吉が天下統一
- ◎ 秀吉没後、激化する政争
- ◎ 豊臣、徳川に二分し真田家存続を図る
- ◎ 第二次上田合戦
- ◎ 真田丸ゆかりの地 白井城址・白井宿
- ◎ 佐藤次郎〈伝説のテニスプレーヤー〉
- ◎ お客様紹介 みかわ園 様
- ◎ 名瀑探訪 三段の滝

名瀑探訪

三段の滝

SANDAN
NO
TAKI

(群馬県南牧村)



約50メートルの高低差を三段階に分かれて落水する滝です。急峻な碧岩から流れ落ちており、水の透明度が高く、豊かな自然を感じることができます。最上段と二段目の落差が大きく、三段目は水流の向きが変わるため、変化に富んだ滝の姿を楽しめます。県道沿いの駐車場から遊歩道があり、約30分で滝に着きますが、途中には歩道として整備されていない場所がありますので、歩きやすい靴で行ったほうが良いでしょう。



和'S YAMATO

夏号(第29号) 2016

『和's YAMATO』の由来

ヤマトの漢字の「和」、Water & Airの頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。ヤマトが発信するメッセージです。

株式会社ヤマト情報誌

和's YAMATO 2016 夏号 / 2016年6月発行

発行:株式会社ヤマト(広報室) 群馬県前橋市古市町118 TEL.027-290-1891 FAX.027-290-1896

群馬県前橋市古市町118 〒371-0844 TEL.027-290-1800(代) FAX.027-290-1896

支店 / 東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北

営業所 / 軽井沢、伊勢崎、神奈川県、茨城、太田、東松山、新潟、長野、渋川、川口、多摩、横須賀、滋賀

附属施設 / 大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、

朝倉工場、サポートセンター、教育センター、コンタクトセンター

ヤマトホームページ www.yamato-se.co.jp/

株式会社 ヤマト





迫力のある合戦の再現（北條まつり）



鉢形城跡全景



盛大な武者行列（北條まつり）



真田昌幸に扮した武者が氣勢を上げる（北條まつり）

北條まつり

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉の小田原攻めの時、鉢形城（埼玉県寄居町）に陣取った郷土の武将北条氏邦は、五万人の豊臣勢を相手に、わずか三千五百人の兵力で一ヶ月余り攻防戦を続けました。この時の戦いを再現したものが「寄居北條祭り」です。平成二十八年五月八日（日）に行われた第五十五回北條祭りでは、大勢の武者隊が行進した後、北条豊臣の両軍に分かれて、荒川河畔で戦国時代さながらの迫力ある攻防戦が披露されました。

石田三成の水攻め

天正十八年（一五九〇）、三月、豊臣秀吉は関東平定のため、そのころ関東を配

していた北条氏の拠点である小田原へ出陣しました。忍城主の成田氏は北条氏に属していたため、秀吉方の武将、石田三成によって攻められることになりました。六月五日、三成は地形や季節を考へて水攻めを計画し、約一週間で延長二十八キロにもおよぶ堤を築き、利根川と荒川の水を引き入れました。しかし、城が沈まなかったため、これを見た人々は「浮き城」として、その名を轟かせました。現実には、忍城の地形がまわりよりも少し高かったため、沈まなかったと考えられます。その後堤は切れてしまい、水攻めは失敗に終わりました。三成の築いた堤は、「石田堤」として、今も一部が残っています。



忍城（埼玉県行田市）の外観



石田堤史跡公園（埼玉県行田市）



北条氏の滅亡で秀吉が天下統一



小田原城天守閣



小田原城址公園の地図



小田原城 銅門



常盤木門



馬出門

NHK大河ドラマ『真田丸』

戦国時代の荒波をかくぐる真田丸

2016年NHK大河ドラマ「真田丸」は、乱世の戦国時代を生き延びていくために、強大な武將と渡り合い、奇策で翻弄しながら家督を守り通した真田氏の物語です。大阪の陣では、戦国時代最強の砦といわれる「真田丸」を作り上げ、徳川家康を窮地に追い込む劇的な戦を実践しました。「真田丸」とは、真田一族の命運を託した小舟にもたとえることができます。

上野（群馬県）の沼田をめぐる衝突や駆け引きを繰り返していた真田昌幸、徳川家康、上杉景勝は豊臣秀吉に臣従したため、争いは収まったものの、関東制圧を目論む北条氏は秀吉に従わず、真田氏が領有する沼田城をたびたび攻撃していた。秀吉は、北条氏に対し、上洛して臣従すれば、沼田城を含む三分の二を北条に与えると約束した。しかし、北条方は上洛のそぶりを見せても実行することなく、沼田で真田氏が領有していた名胡桃城を策略で奪い取ってしまう。

北条氏は秀吉を成り上がりものと蔑んでおり、臣従するつもりはなく、秀吉と一戦交えるつもりで戦闘の準備をしていた。北条氏の本拠地・小田原城はかつて武田信玄や上杉謙信の軍でも落とせなかったため、北条方にとっては難攻不落の城との自負があり、箱根の山を越えて小田原に入ろうとする秀吉軍を迎え撃とうと待ち構えていた。また、箕輪城、松井田城など、関東各地の北条が抑えている城で防戦し、敵はそのうち兵糧が尽きて撤退すると考えていた。

ところが、天正十八年（一五九〇）、小田原征伐に参加した豊臣軍は、約十七万の主力軍と、昌幸、上杉景勝らが加わった北方隊の約三万五千、さらに長宗我部元親らの水軍が約一万と、総勢約二十一万の大軍となっていた。主力軍のうち約七万は東海道筋にある山中城を攻略、また、箱根周辺にあった鷹ノ巣城や足柄城も落とされ、さらに水軍部隊は下田城を攻略して小田原沖に展開する。小田原城は徳川軍に完全に包囲されるのである。



『犬伏の別れ』薬師堂 (栃木県佐野市)
この中で密談したといわれている。



戦国合戦図屏風 関ヶ原の戦い 徳川家康本陣 (岐阜市歴史博物館蔵)



勇ましい姿の小松姫
沼田市の大河ドラマ展で展示されている。



犬伏密談図 (上田市立博物館蔵)

慶長五年(一六〇〇)六月十六日、家康は会津征伐軍を率いて大坂を出発し、時間をかけて進軍した。これは三成が上方で挙兵するのを待っていたのだ。真田家は昌幸、信之、幸村(信繁)と揃って従軍していた。家康は七月二日江戸に到着する。すると、思惑どおり三成が大坂で挙兵し、大坂城西の丸を奪取し、七月十八日には四万の大軍で伏見城を攻撃し、徳川勢を撃退した。三成挙兵の知らせが家康の元に届いたのは、下野の小山に着陣し



沼田城に着き、面会を申し入れたものの、城を守っていた信之の妻・小松姫(稲)は「例え義父様でも今は敵と味方。主人の留守中に敵方を城内に入れることはできません」と拒絶したのだ。

それを聞いた昌幸は「さすがは徳川家中きつての名将・本多忠勝殿の娘だ」と賞賛し、面会を諦めたが、小松姫のはからいで城外の正覚寺で孫との対面ができたという。



肥前名護屋城跡
(佐賀県唐津市)

総面積は17万㎡、金箔瓦で覆われた5重の天守を130棟余の大名陣屋が囲んでいた。その壮大なスケールに圧倒される。
(佐賀県観光連盟提供)

小田原に本拠を置く北条氏が秀吉に敗北すると、奥州の各大名も恭順の意を示し、秀吉の天下統一が成し遂げられ、長期間にわたった戦国時代が終焉した。国内の戦乱は終息したものの、秀吉は朝鮮半島に出兵し、朝鮮や明を配下に収めるための軍事行動を起こした。朝鮮出兵(文禄・慶長の役)の目的は、秀吉がアジア大陸を征服する野望を抱いていたとする説、国内での戦争が無くなり、武士が武士らしく戦うことができなくなったため、外国に戦う場を求めたとするな



秀吉の死後、 激化する主導権争い

ど諸説ある。文禄・慶長の役により、日本軍と朝鮮・明の連合軍は十六世紀最大の世界戦争といわれるほどの激しい戦闘を繰り広げたものの、結果としては日本にとつての国益を見出すことができなかったばかりか、発足間もない豊臣政権の弱体化を招き、さらには大名間の不協和音が増幅するというマイナス面が顕著になった。

先行きの見えない朝鮮半島での戦に国力を傾けていた秀吉は、慶長三年(一五九八)八月、伏見城内で死去した。豊臣政権中枢の五大老(徳川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜多秀家)と五奉行(石田三成、浅野長政、増田長盛、長束正家、前田玄以)は、海外での戦争に意義を見出せず、朝鮮からの撤退を決めた。戦争が終わると秀吉亡きあとの主導権をめぐり、豊臣政権内での内紛が顕在化し、政権内の武断派(加藤清正、福島正則など)は、文治派の代表格である石田三成への反発を強めていた。この政争に政権存続の危機を感じていた前田利家は、両派の調停役として動いていたが、秀吉を追うように慶長四年(一五九九)三月に死去。両派の対立は深まるばかりだった。

慶長四年三月、豊臣政権の内紛は激化し、福島正則、加藤清正、黒田長政、池田輝政、細川忠興、浅野幸長、加藤嘉明の七将が、大坂の石田屋敷を襲撃し、石田三

成を殺害しようとした。しかし三成は襲撃を受ける直前に、佐竹義宣の助けを借りて屋敷を脱出、反目していたはずの家康に助けを求めたのだった。

三成を追う七将は家康に引き渡しを要求するが、家康はそれには応じず、裁定案を示した。それは、三成を隠居させ政治の表舞台から降ろすことと、武断派の七将にとつて不満があった朝鮮の役での戦功の見直しを約束し、七将を納得させた。いかにも公平な仲裁案のようだが、家康は、三成を生かしておくことにより、豊臣恩顧の大名たち同士の反目を助長させ、自らの立場を有利にしようと画策していたのだ。この策はまんまと的中し、政敵の三成を失脚させた上に、豊臣恩顧の七将を手なずけて自らの陣営に引き込むことに成功する。そして諸大名からは「家康の裁定は公平で信頼できる」という評価を得ることもできたのである。

家康は三成を失脚させた後、反家康勢力を一掃するため、様々な策を実行する。その一つが上杉景勝への謀反の嫌疑だった。上洛しての弁明を求める家康に従わない景勝。家康こそ言いがかりをつけているといった内容の書状「直江状」を上杉家の家老・直江兼続が家康に送りつけたという。こうした挑発行為に対し、家康は上杉の謀反に疑い無しとし、諸大名に会津征伐の号令を発したのである。

豊臣、徳川に二分し真田家存続を図る

た七月二十四日であった。家康は会津征伐に参加していた諸大名を招集し、以後の方針を協議した。評定の席上、福島正則が家康へ味方することを宣言すると、諸大名もこれに従った。

真田家の三人は下野犬伏の陣で語り合い、昌幸と幸村(信繁)は西軍、信之は東軍に味方することを決めた。信之の妻は家康の重臣・本多忠勝の娘であり、幸村(信繁)の妻は西軍に与した大谷吉継の娘であることも理由だった。昌幸と幸村(信繁)は居城のある上田を目指した。幸いにも、家康は昌幸らに追撃をかけたかった。そして昌幸は上田に向かう途中、信之の居城である沼田城に立ち寄る。今回の戦では生きながらえるのは難しいかもしれないと考え、せめて孫の顔が一目見たいという思いが募ったのだ。



元和2年(1616)	信之、このころから上田の統治に専念
元和8年(1622)	信之、上田から松代に移封
万治元年(1658)	信之、93歳で没す
慶長20年(1615)	幸村、大坂夏の陣で家康の本陣に迫る奮戦の後、戦死
慶長19年(1614)	幸村、豊臣方の挙兵に応じ、九度山を発ち大坂城に入る
慶長16年(1611)	幸村、大坂夏の陣で家康の本陣に迫る奮戦の後、戦死
慶長15年(1610)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長14年(1609)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長13年(1608)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長12年(1607)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長11年(1606)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長10年(1605)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長9年(1604)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長8年(1603)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長7年(1602)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長6年(1601)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長5年(1600)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長4年(1599)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長3年(1598)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長2年(1597)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長1年(1596)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長0年(1595)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-1年(1594)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-2年(1593)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-3年(1592)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-4年(1591)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-5年(1590)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-6年(1589)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-7年(1588)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-8年(1587)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-9年(1586)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-10年(1585)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-11年(1584)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-12年(1583)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-13年(1582)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-14年(1581)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-15年(1580)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-16年(1579)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-17年(1578)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-18年(1577)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-19年(1576)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-20年(1575)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-21年(1574)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-22年(1573)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-23年(1572)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-24年(1571)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-25年(1570)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-26年(1569)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-27年(1568)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-28年(1567)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-29年(1566)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-30年(1565)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-31年(1564)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-32年(1563)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-33年(1562)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-34年(1561)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-35年(1560)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-36年(1559)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-37年(1558)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-38年(1557)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-39年(1556)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-40年(1555)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-41年(1554)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-42年(1553)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-43年(1552)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-44年(1551)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-45年(1550)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-46年(1549)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-47年(1548)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-48年(1547)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-49年(1546)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-50年(1545)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-51年(1544)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-52年(1543)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-53年(1542)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-54年(1541)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-55年(1540)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-56年(1539)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-57年(1538)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-58年(1537)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-59年(1536)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-60年(1535)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-61年(1534)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-62年(1533)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-63年(1532)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-64年(1531)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-65年(1530)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-66年(1529)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-67年(1528)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-68年(1527)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-69年(1526)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-70年(1525)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-71年(1524)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-72年(1523)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-73年(1522)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-74年(1521)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-75年(1520)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-76年(1519)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-77年(1518)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-78年(1517)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-79年(1516)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-80年(1515)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-81年(1514)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-82年(1513)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-83年(1512)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-84年(1511)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-85年(1510)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-86年(1509)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-87年(1508)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-88年(1507)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-89年(1506)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-90年(1505)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-91年(1504)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-92年(1503)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-93年(1502)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-94年(1501)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-95年(1500)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-96年(1499)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-97年(1498)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-98年(1497)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-99年(1496)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る
慶長-100年(1495)	昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る

真田三代略年表



天文10年(1541) 武田・諏訪・村上の連合軍、海野平で海野氏を破る

天文14年(1545) 真田幸隆、このころ武田信玄に出仕

天文19年(1550) 信玄、砥石城を攻めて敗退(砥石崩れ)

天文20年(1551) 幸隆、独力で砥石城を乗っ取る。真田の本領を回復

天文22年(1553) 川中島で甲越両軍の戦い(第1回)

永禄4年(1561) 川中島で信玄・謙信、激戦

永禄7年(1564) 幸隆ほかの武田勢、上州の岩下城、岩櫃城を攻略

永禄10年(1567) 信玄、配下の武將に起請文を書かせる

天正元年(1573) 信玄、三河侵攻の帰途に信州駒場で死去

天正8年(1580) 昌幸、上州沼田城攻略

天正10年(1582) 武田家滅亡。昌幸は織田信長に従属

天正11年(1583) 昌幸、上田城を築き始める

天正12年(1584) 上田城完成。昌幸、徳川から離反、上杉景勝を頼る

天正13年(1585) 昌幸、家康の北条氏への沼田城明け渡し命令を拒否、家康と手を切る。

昌幸父子、大挙して攻める徳川軍を撃退(第1次上田合戦)

天正14年(1588) 昌幸、秀吉に臣従

天正15年(1587) 昌幸、秀吉の仲介で家康の配下となる

天正17年(1589) 秀吉裁決で沼田城は北条氏に

真田に残された名胡桃城が北条の猪俣邦憲に奪われる

天正18年(1590) 秀吉、北条を討伐。沼田城は真田に復す

真田父子も参戦

慶長3年(1598) 秀吉が没する

慶長5年(1600) 昌幸、幸村は石田三成方に属し、犬伏の陣より上田城に戻る

信幸は徳川方に属する。昌幸らは徳川秀忠の大軍を上田城に迎え討ち、釘づけにする。(第1次上田合戦)

関ヶ原の戦いで西軍が敗れ、昌幸、幸村は高野山に配流となる

九度山で昌幸病没、65歳

慶長16年(1611) 幸村、豊臣方の挙兵に応じ、九度山を発ち大坂城に入る

慶長19年(1614) 真田丸を築いて、徳川方を破る(大坂冬の陣)

大阪城は落ち豊臣氏滅ぶ

元和2年(1616) 信之、このころから上田の統治に専念

元和8年(1622) 信之、上田から松代に移封

万治元年(1658) 信之、93歳で没す



真田父子は高野山へ配流

慶長五年(一六〇〇)九月十五日、家康の東軍、三成の西軍はそれぞれの諸隊を進軍させ、両軍合わせて約二十万もの大軍が関ヶ原の地に集結しつつあった。大垣城で東軍を迎撃しようとしていた三成の意図は読まれ、家康が得意とする野戦に持ち込まれた。午前七時頃、井伊直政と松平忠吉の隊が、前方の宇喜多秀家の部隊に鉄砲を仕掛け、福島隊も宇喜多隊に一斉射撃を加え、これが合図となり、合戦の火蓋が切られた。

西軍は十万を超える軍勢が布陣していたが、実際に戦っていたのは三万三千ほどしかいなかった。しかし、西軍は戦闘に有利な陣地を抑えていたため、緒戦は西軍が優勢であった。三成は傍観を決め込んでいた諸將に参戦を促す狼煙を挙げ、陣所に使者を差し向けたが、内心では三成に反感を持つ軍は戦闘に参加しない。家康は、東軍への寝返りを小早川秀秋に促していたが、なかなか動かない秀秋に対して、陣に向けて大砲を放った。この荒っぽい督促に応じ、秀秋は大谷吉継の陣に攻めかかった。小早川隊に呼応して西軍陣地に攻めかかる隊が続出し、一進一退だった戦いは、一気に東軍勝利へと向かい、わずか一日で終了した。

西軍に味方した真田父子は、当初は処



関ヶ原古戦場跡の碑



戦国合戦図屏風 関ヶ原の戦い 石田三成本陣 (岐阜市歴史博物館蔵)

刑される予定であったが、真田信之やその岳父・本多忠勝の助命嘆願により、高野山へ預けられることになった。

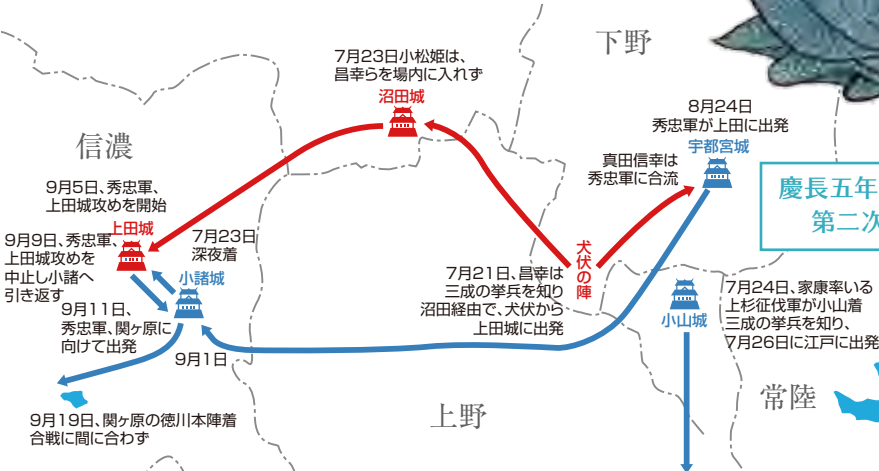
関ヶ原の戦いは一日で決着



第二次上田合戦



上田篋城図 (上田市立博物館蔵)



慶長五年(1600) 犬伏の別れ 第二次上田合戦関連図

小山に集結した大軍は、小山評定といわれる評議の結果、会津征伐を中断して三成を討つため上方へ向け進路を反転させる。主力部隊を率いる徳川秀忠は、関ヶ原へ向かう途中で真田氏を征伐しようとして上田城に立ち寄ることとした。

秀忠の軍には真田信之も参加していた。徳川方は真田軍の十倍以上の兵力を有しているため、秀忠は大軍で押し寄せれば昌幸は降伏するものと決めてかかっていた。小諸に着陣した秀忠は、昌幸に開城を促したものの、昌幸は「開城はするものの、準備に時間がかかる」という返答で、昌幸は城から出てくる素振りを見せなかった。数日後に昌幸から「やっと籠城の準備が整いました。存分に戦いましょう」という返答が届いた。関ヶ原に急ぐ途中で無駄な時間を費やした秀忠は激怒し、上田城を総攻撃する第二次上田合戦が始まった。

徳川軍は再び真田軍に敗れる

徳川軍が最初に落としたのは砥石城だった。砥石城を守っていたのは幸村(信繁)で、兄信之の軍勢が進軍してきた。幸村(信繁)は兄が大将として攻撃することを知らず、あっさりと城を捨てて上田城に引き揚げたという。砥石城を簡単に落とした徳川軍は、真田軍の城兵の挑発で城内に深入りしすぎ、真田の鉄砲隊による一斉射撃を浴びてしまう。また真田軍は前回の上田合戦と同様に神川に堰を設けて水流を調節し、増水した川の流に足を取られた多くの兵が簡単に討ち取られた。秀忠が攻めあぐねている時に、関ヶ原への到着が遅れることを危惧する家臣から、上田城攻めは中断して早く出発すべきと進言され、秀忠が小諸に帰り着くと、家康からの書状が届いていた。それには「九月九日までに美濃赤坂に着陣すべし」と記されていたのだ。上田で十日以上も足止めされた秀忠は徳川本陣の美濃を目指して急行した。しかし関ヶ原の戦いは九月十五日に決着した。秀忠は、関ヶ原の戦いに遅参するという失態を演じたばかりか、大軍で押し寄せても真田を破ることができないという不始末で、家康から大将としての資質を疑われることとなった。



真田丸ゆかりの地「白井城址」群馬県渋川市白井

天正六年には真田昌幸が城代に

白井城は、十五世紀半ば頃、子持村白井に白井長尾氏の居城として築城されたと推定されている。長尾氏は桓武平氏の流れをくむ鎌倉氏の一族で、諸家に分かれた。白井・総社長尾氏は、長尾景忠（かげただ）が建武四年（三三七）に初代関東管領の上杉憲顕（のりあき）に仕えるために上野国に入ったといわれ、上杉憲顕から始まる山内上杉氏の家宰（家長の代理）を務めた。室町時代に入ると、山内上杉氏の有力武将として勢力を増大し、同時代に雙林寺などが創建され、周辺地域の軍事・政治・経済の拠点となった。

戦国時代になると主家である山内上杉氏の勢力は衰え、白井城は長尾景虎（上杉謙信）や武田信玄、小田原北条氏といった大大名による領地拡大の標的となり、攻防戦が繰り返された。天文二十一年（一五五二）に山内上杉氏の当主・上杉憲政は北条氏に敗れ越後の上杉

謙信（上杉憲政の養子）のもとに逃れた。元龜二年（一五七二）武田方の真田昌幸の侵攻により白井城は開城、この後、天正六年（一五七八）に武田氏は白井領を支配し、真田昌幸が白井城代に在任していた。

武田家が滅びると、長尾輝景が織田家家臣滝川一益に接近し、長尾氏が再び白井城の城主になる。織田信長が本能寺の変で倒れると滝川一益が上野国から撤退し、関東で勢力を拡大する北条氏に従属した。

天正十八年（一五九〇）の小田原征伐の際には、前田利家・上杉景勝等に侵攻され白井城は落城、白井長尾氏は滅亡する。最後の白井城主の政景は、同族長尾氏の上杉景勝に仕えた。北条氏が滅びると関東へは徳川家康が移封となり白井城には本多康重が2万石で入り、慶長六年（一六〇二）に松平康長が入封すると白井藩を立藩、白井城には藩庁が設けられ領内の政治、軍事の中心となる。その後は、短期間で西尾忠永・本多紀貞などと藩主が変わり元和九年（一六三三）本多紀貞に嗣子がなく病死すると白井藩は廃藩、白井城も廃城となり、以後幕府領に組み込まれた。



見学者に説明する須田氏（白井観交（光）案内人の会会長・左端）



笹郭



帯郭



三の丸



源空寺
天正18年(1590)に本多康重が白井藩を立藩した際に、康重の父・本多広孝が開いた



三日月堀



本丸



白井城址の枳形門



二の丸側の本丸の土塁



本丸と二の丸の間の空堀

白井城の構造

白井城は梯郭式の平城ですが本丸背後が吾妻川で出来た断崖を利用した自然の要害の地で、又、利根川とも合流する交通の要衝でした。城域は東西800m、南北1200mと広大で本丸の北方には二の丸、三の丸と続きそれぞれが深い空堀で分断され、さらに外側には北郭、金毘羅郭が配されました。南東側にはささ郭、南郭、新郭が防衛ラインを築き、城下町（吹屋・白井）全体を総郭で囲む構造になっていました。現在白井城跡は山林と農地になっていますが、郭や空堀り、土塁、櫓台（烽火台）といった遺構がかなり明瞭に残り本丸虎口の枳形など部石垣も見られます。平成16年には本丸・ささ郭部分の二万五六八三㎡が渋川市指定史跡に指定されました。



真田昌幸
真田地域自治センター蔵



真田丸ゆかりの地「**白井宿**」群馬県渋川市白井

城下町から交易の中心地に発展



真田昌幸所用具足
上田市立博物館蔵

白井宿を整備したのは室町時代中期に白井城主であった長尾景仲で、当時は城下町として発展した。戦国時代には白井城をめぐり上杉、武田、北条が攻防を繰り返し、城下町は大きな被害を受けた。北条氏が滅び徳川家の支配になると、城主となった本多康重が廃城になった白井城の整備、拡張や城下町の町割りなどに尽力し、現在に繋がる基礎が出来上がった。

元和四年（一六二八）、西尾忠永が土浦藩（茨城県土浦市）に移封になると本多紀貞が城主となったが、本多紀貞に嗣子がなかったため、元和九年（一六二三）に白井藩は廃藩となり、城の機能も失われた。元来、白井宿は城下町で、主要街道の宿場町ではなかったものの、吾妻川と利根川が合流する交通の要衝であ

るとともに、古くから白井文化圏の中心になっていた事等から、交易が盛んな独自の経済圏を維持し続けた。

現存している白井宿の町並みは、約九百メートルで、江戸時代の土蔵造りの家並みが残っているのは豊嶋屋（埴田家）と薬種屋（宮下家）の二軒である。豊嶋屋は江戸期を通じての豪商で、酒造・質屋を営み、幕末期には生糸で横浜貿易に参画している。税（うだつ）付長屋門と土蔵も現存している。薬種屋にも土蔵が現存しており、市が立つ日には家伝薬を販売していた記録が残っている。

白井宿の市は、毎月五日・十日・十五日・二十日・二十五日・晦日の合計六回定期的に開かれ、「五十の六斎市」と呼ばれた。



満開の八重桜のもと、恒例の武者行列が行われました（平成28年4月24日撮影）



白井宿観光（光）案内人の会会長 須田 孝氏



江戸時代から伝わる町並みの名残を感じることができます



六文銭の真田家紋をつけた鎧の武者が登場しました

真田丸ゆかりの地・上州

上州の長尾氏と上杉謙信



取材協力
群馬県済生会前橋病院管理局長
総社長尾氏御一族 長尾景茂氏

室町幕府は東国支配の機関として鎌倉府を置き、将軍家の足利一族が鎌倉公方を世襲しました。上杉氏は将軍家と姻戚関係があり、山内上杉家は鎌倉公方を補佐する関東管領職を世襲し、上野国守護も務めていました。山内上杉氏には、管領を補佐する家宰という役職があり、長尾氏が家宰職を握っていました。足利将軍家と鎌倉公方は同族でありながら対立し、永享の乱（四三八）、享徳の乱（四五四）など、関東は争乱の時代となりました。この時代に家宰の上州・長尾氏は三家が分立し、拠点とした地名を冠して惣社長尾氏（前橋市）、白井長尾氏（渋川市）、足利長尾氏と呼ばれ

為、地下水は低く飲料水の確保には苦労を極めました。土地は火山灰土で水田に向いてないため全て畑であったそうです。「白井にお嫁に行くのはおよし、田なし米なし、井戸深し」と言われたそうです。町の地割りは南北の主要道を挟んで、道路に直角に短冊形に設定されていて、東側は長く、西側は城郭の役目をした段丘に制約されて短い。地割りは3間幅から最高36間幅まであり、5間幅6間幅7間幅が最も多い。元禄13年（一七〇〇）の村明細帳では、火山灰土で水田に向いてないため全て畑であった。同年の家数は150人数749。安政6年（一八五九）横浜開港以後は繭生糸の生産が活発でした。町並は明治31年の大火後に建てられた家屋が多く、古い家屋は少ないが、道路中央に流れる用水路が当時の町並を彷彿とさせています。そんな中で二部であるが土蔵造りの家屋も残り、共同井戸や路傍の石造物など、昔の佇まいを今に残しています。

取材協力 白井宿観光（光）

案内人の会会長 須田 孝氏

ました。

天文二十二年（一五五二）に山内上杉氏の当主上杉憲政は北条氏に敗れ越後の上杉謙信（上杉憲政の養子）のもとに逃れました。白井城をはじめ上野の領地を北条氏に奪われた上杉憲政は、上杉謙信に領地奪回を要請、これに応えて謙信は永禄三年（一五六〇）に第二回目の関東平定の軍をおこしました。謙信軍は北条方の拠点沼田城を落とし、翌四年三月には北条の本拠小田原城を攻撃しました。しかし、小田原城を落とすことはできず、撤退しました。

上杉憲政が北条氏に敗れて越後に逃れてから、謙信が北条との対戦のため上州に乗り出すまでの八年間、白井長尾氏、総社長尾氏は越後の謙信と連絡をとり、関東の情勢を知らせていたということです。謙信の関東計略は、白井長尾氏、惣社長尾氏の援助で上野を基盤にできたから実現したのです。

佐藤次郎

昭和初期に驚異の強さで**世界3位**にランク

並みいる強豪と互角に戦った**テニスプレーヤー**



佐藤邸に飾られているラケットを携えた佐藤次郎氏の遺影



佐藤邸の庭にある佐藤氏の偉業を称える石碑
ラケットと賞杯をモチーフにしている

佐藤次郎氏は、世界ランキング三位の実力を持つテニスプレーヤーで、昭和初期に数々の世界大会で華々しい活躍をしました。二歳の若さで全日本選手権を制し、世界に進出すると四大大会(注)のシングルスで合計五回もベスト4に進むなど、輝かしい戦績を残しました。現在は錦織圭選手が活躍し、テレビ中継では度々佐藤氏を取り上げられています。

当時の日本は欧米での知名度は低かったものの、佐藤氏のテニスは賞賛され、多くの外国人が佐藤氏を応援したといえます。彼はコートで真剣に戦い、テニス技術は外国の強豪選手から地道な努力で学んだもので、勝利へのひたむきなブレが共

感と呼んだのです。佐藤氏は「テニスは技術だけでは勝てない。全人格で勝つのだ」と言っていたといえます。

国別対抗戦のデビスカップでは、日本のエースとしてシングルス通算14勝4敗の成績を残し、その強さを見せつけました。当時の日本は、戦時色が強かったこともあり、国威発揚の場として国別対抗戦のデビスカップで勝つことが至上命令で、佐藤氏はその期待に応える活躍をしました。世界ランキングでは三位となり、並みいる強豪と互角の戦いを演じました。

当時、テニス界は黄金時代を迎えていました。ボロシャツのロゴでなじみ深いフランスのルネラコステ、イギリスのフレッドペ

リーなど、歴史的な名プレイヤーが活躍し、佐藤氏は彼らと肩を並べる存在でした。その名は世界中に知れわたり、喜劇王のチャップリンとも親交を深めたといえます。そうした活躍にも関わらず、佐藤氏は苦悩していました。昭和九年(一九三四)一月、デビスカップに出発する前に前橋市の群馬会館で佐藤氏を囲む座談会が行われましたが、そのときに話に脈絡が無く、精神的に不安定な様子だったということ

です。兄の佐藤太郎氏も、体調不良からデビスカップ出場は辞退したほうが良いと勧め、本人も辞退を考えていましたが、国の名誉がかかる大会の欠場は許されず、同年三月二十日、神戸港から航路旅立ったのでした。その直後の四月五日、マラッカ海峡船上から投身自殺を図り、帰らぬ人となりました。遺書には、「とてもテニスはできません」と書かれ、優勝できないことに対し死をもって国に謝罪するといった内容でした。勝利至上主義の犠牲になったともいえます。たとえ優勝ができなかったとしても、全身全霊をかけてテニスに向き合つての世界ランキング三位という偉業は、後世にまで伝わることとなりました。

東京日日新聞昭和九年四月七日付では、妹と世子さんの悲しみにくれる談話が掲載されました。「毎年デビスカップから帰ってくると、よほど心や体を使うものとみえて、すつか

り弱っていました。去年帰ってきたとき、長兄が兄(次郎氏)に「もう技術はこれ以上は望めないから来年でやめたらどうか」と勧め、本人も余り期待されすぎて責任が重すぎるから心から行きたくないよう

でした。」
(注)四大大会(グラッドラム)
全豪オープン・全仏オープン・全英オープン・全米オープン



佐藤家の佐藤節子さん(右)は佐藤次郎氏の兄太郎氏の長男に嫁ぎました。理夏さん(左)は太郎氏の孫です。今回の取材にご協力いただきました。
(渋川の佐藤邸にて撮影)2016年2月16日

佐藤次郎選手の略歴

明治41年(1908年) 1月5日北群馬郡子持村夏保に生まれる。

大正11年(1922年) 長尾小学校を経て、旧制渋川中学校(現在の渋川高校)に進学

大正14年(1925年) 群馬県下庭球大会で、佐藤太郎(兄)と組んで優勝。

大正15年(1926年) 軟式庭球の選手として活躍した。
早稲田大学第一高等学院(旧制)に進学し、硬式テニスを始める。

昭和4年(1929年) 同大学の政治経済学部に進学。

昭和5年(1930年) 全日本選手権で初優勝し、日本ランキング1位となる。
初めて国際大会に出場し、フイリピンナショナル選手権大会で優勝。

(このときの優勝カップが寄贈され、佐藤次郎杯として今に至る。)

昭和6年(1931年) 全仏選手権大会 ベスト4

全英選手権(ウィンブルドン)大会 ベスト8
世界ランキング 9位

初のデビスカップ戦の代表となり準決勝まで進出。
全英選手権大会 ベスト4

全豪選手権大会 ベスト4
再びデビスカップ戦の代表となり、準決勝で敗退。

デビスカップ戦の代表として三度準決勝まで進出。オーストラリアと対戦し、この年の世界ランキング1位のクロフォードを破ったが、日本は2対3で惜敗。全英選手権大会では、ダブルスで布井選手と組んで決勝まで進出。

シングルスでは、準決勝でクロフォードに惜敗。
全仏選手権大会 ベスト4

世界ランキング3位

昭和9年(1934年) 四度目のデビスカップ戦の代表となり、その遠征途中の4月5日、船上からインド洋マラッカ海峡に身を投じ、27年の生涯を終える。



渋川高校資料室にある佐藤選手関連の貴重な品々



佐藤次郎氏が愛用していたラケット(群馬県立渋川高等学校資料室に保存されている)



渋川高校で開催されている佐藤次郎杯の賞杯
初の国際大会の優勝カップが寄贈された



渋川高校校庭に設置されているブロンズ像



渋川高校に飾られている佐藤選手の肖像画



全英ウィンブルドン大会(1932年)準決勝で戦う佐藤次郎氏



海外遠征の際に使用した大型のトランク



佐藤邸にあるブロンズ像 現在でも子孫の方々に道徳を偲ばれている



外観

平成十二年（一九九九）十一月に開設した「みかわ園」は、特別養護老人ホーム、デイサービス、ショートステイを併設しています。天然記念物のカモシカが顔を出し、日本の巨木、天然杉の「將軍杉」がある、自然豊かな地域です。

ショートステイは、生活リハビリ、ハンドセラピー、季節ごとのレクリエーションを実施し、元気で笑顔になれる「をモットーにサービス提供しています。その効果もあり、「また行きたい。泊まりたい」と話すご利用者も多くいらっしゃいます。

デイサービスでは、理学療法士の奥山卓氏の指導を受け、効果的な運動療法を行うとともに、「ゲーム機」を使用して脳トレなども実施しています。特養では、約3ヶ月の期間を定めて在宅利用者を受け入れる「在宅入所相互利用」を行っています。個性あふれる職員とご利用者が思いきり笑いあえる、活気あふれる施設です。



施設のお祭りで活躍する神輿

お客様の
声

加藤真由美 施設長

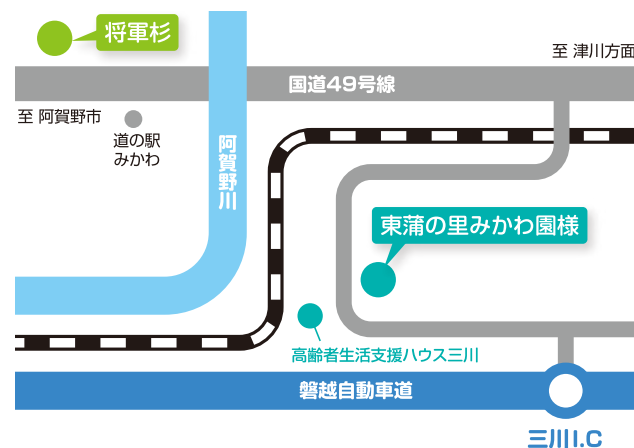
東蒲の里みかわ園は、山あいの豊かな自然の中にある施設です。平成十一年の開設以来、おかげさまで十六年が経過いたしました。空調設備の更新時期に差し掛かっている時期に、ヤマトさんの蓄熱システムに出会うことができました。ヤマトさんの大温度差蓄熱システムは、これから十年、十五年と長期にわたる維持管理コストを考えてみたとき、メリットがあるシステムだと思っています。また、電気は災害が起こった時に一番早く使えるようになるので、ご利用者にとっても安心感があり、オール電化の施設になったことは大変心強く感じています。

当施設では、サービスを利用される皆様、少しでも元氣になり、笑顔がみられるよう職員全員で取り組んでいきます。これからもご利用される皆様に思いやりをもつて接し、地域に密着したぬくもりのある施設にしていきたいと思っています。



加藤施設長（右から二番目）とスタッフの皆さん

東蒲の里みかわ園様・將軍杉周辺マップ



種別：国天然記念物 名称：將軍杉
指定年月日：昭和2年4月8日
所在地：新潟県東蒲原郡阿賀町岩谷（平等寺内）
アクセス：磐越自動車道三川I.Cから車で約5分

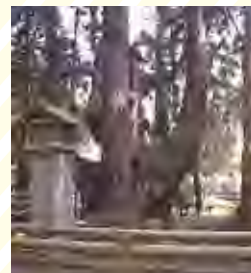
日本一の杉の巨木 將軍杉

みかわ園様からすぐ近くです

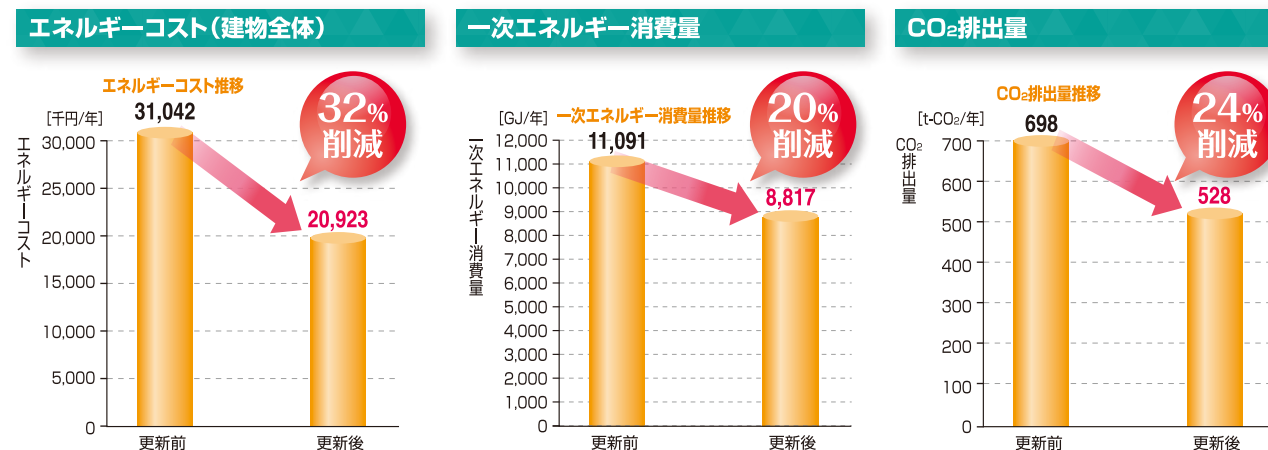
四方に太い枝を伸ばした將軍杉は、樹齡が推定で千四百年、幹周19.31m、樹高38mの巨木です。平成十二（十三）年度に環境省が行った「全国巨樹・巨木・巨木・巨木・巨木調査」での杉の部において、それまで日本であった鹿児島県屋久島の縄文杉（18.1m）を抜いて日本一の巨木となりました。

「將軍杉」という名の由来は、平安時代中期に、晩年をこの地で送ったとされる陸奥鎮守府將軍・平維茂にちなんでつけられたものといわれています。

將軍杉に関わる様々な伝説も残っています。昔、集落の人々は阿賀野川の水運で生計を立てていたが、ある時、新しい船に使う帆柱がないので將軍杉を伐採して作ることを決め、翌朝斧を持つて杉のところにやってみると、一晩にして枝下の部分まで地下へ沈んでいました。これ以来、村人たちは將軍杉を手厚く保護し、今に伝わることです。



更新後の導入効果試算



施設概要	施設名称 特別養護老人ホーム東蒲の里みかわ園
所在地	新潟県東蒲原郡阿賀町あが野南4319番地4
建築概要	鉄筋コンクリート造2階建
延床面積	3,450㎡
用途	福祉施設
開所日	平成11年11月
更新工事竣工日	平成28年1月
設計者	株式会社ヤマト
施工者	株式会社ヤマト
システム概要	建築工事 ガラス断熱強化 (日射調整フィルム貼付) 空調熱源 ヤマト大温度差蓄熱空調システム 高効率空冷ヒートポンプチャiller 40馬力×3基 空調蓄熱槽 140㎡ 給湯熱源 自然冷媒ヒートポンプ給湯システム 業務用エコキュート 20馬力×3基 給湯蓄熱槽 35㎡×2基 2㎡×1基 6㎡×1基(既存) 遠隔監視 ヤマトTASKPLUS